「私は嫌なおいを発散させている」という患者について

— 人間学的研究 —

Sur le malade qui se croit d'être puant — Etude anthropologique —

足 立 博*
Hiroshi ADACHI

君だつて、この汚穢に、この恐しい腐爛の臭氣に、似た姿といつかは成ろう。わが眼には星と輝き、
わが本性には太陽の君よ

ボードレール

緒 論

Charles Baudlaire¹⁾は Geruchsfanatiker といわれ Schiller, Zola, Flauberts, d'Annunzio などと共に異常な執着をもつてにおいを描いた天才である²⁾。古来、においては人間に対して常に謎めいた不思議な役割りを果たしてきた。森の木蔭の落葉のかおり、波打つ磯の潮のかおりなど、においては自然界にみちて、あらゆる存在物に息吹きを与え生命をよみがえらせている。他の動物と比較し人間の嗅覚は退化しミクロスマテイクといわれ、われわれが知覚としてうけるにおいはあるかなきかの僅かなものかもしれない。だがこのかすかなにおいが、往々人間に決定的な力を及ぼす。ふとにおつてきた美しいにおいが人間の魂の奥深くしみこんで永遠の心像となることもあるのである。若者がハンカチをわきの下にはさんで踊り、汗ばんできた乙女の顔をそれでふいてやることによつて彼女を夢中にさせ、二人は容易にむすばれるという物語³⁾りも単なる喜劇ではない。視覚的概念の空間に住みなれたわれわれには取るに足らないものと見えるかもしれないが、においてはあたかも存在の露出の如く、惜しみつゝ自らを放ち、われわれの肉体の奥深くしみ入つていくものである。そこには他の感覚の領域にはみられない独自性がある。においに関して本質を問おうとする時、まず必要なことは、視聴覚の世界に培われた概念の借用を断念し、そのきづなから逃れでることである。これらにおいては精神症状をあつかう場合も同様である。

表題の示す如く、私がこの論文であつかうのは、自分から発散するにおいに悩まされているという患者であ

る。人間学的研究という本論に入る前に患者たちのおいよそを紹介しなければならない。においては勿論、妄想的なものであり現実になんにおいとは全くしないのであるが、彼等は痛々しいまでに自分の放つ悪臭を確信している。その確信は全く頑固でいく他人がにおつていないと否定してもそれを信じない。そしてなにか身体的な疾患或は異常があるに違いないと内科、外科、皮膚泌尿科、婦人科、耳鼻科、齒科等を訪れる。からだに薬をぬり、香水をかけ、下剤のみ、わきが、包茎、蓄膿症などの手術までする。「におつていないことは間違いない。事実、わたしが行くと人が鼻をならし、鼻に手をやり、くしやみまでする」というように彼らのいうことは非常に狂つていて、はつきり病的といえる。それでいて彼らの多くが長年の間、大した支障もなく社会生活を続けている。そのせいもあるうか。又、全く病識がなく、すぐに通院を断念してしまうせいもあるうか。従来、この種の患者はあまり問題にされなかつた。最近、鹿野らは8例を慢性幻臭患者として記載し、これらの患者の特長と尙残された問題点を適確にとらえている。

私の約30例に関する精神医学的見地からの総括的考察は別の機会にゆづる。臨床的立場からはたゞ以下のうな私の見解をのべるにとどめる。顕著な身体疾患或は重要な精神症状を伴うものをのぞいたという鹿野と異なり、私は妄想的な自分のにおいに悩む患者すべてをふくめて研究している。それ故、個々の患者の症状及び経過は実にさまざまである。緩慢な長い経過をたどるものもあれば、非常に急激な変化を示すものもある。長い間、単一症状として経過するものは多いが、ある時にはおい以外の内容をもつた心気症状、強迫症状を伴い、又ある時は多彩な内容の烈しい幻覚妄想状態におち入る。このよ

* 順天堂大学精神神経学教室

1960年1月23日受付

註 1) Baudlaire におけるにおいについては Sartre, J.-P. のすぐれた実存分析がある。

2) Marcuse, M.: Handwörterbuch der Sexualwissenschaft, Düfte の項

3) 同上

うな患者すべてをふくめた上で、私の見解は、この「私は嫌なにおいを発散させている」という症状が、常にそれ自体、根深い中核症状であつて、単に一時的、偶発的な副次症状ではないということである。雑多な症状、経過を示しておりながら、尙共通してみられる2,3の重要な特長をあげて、におうということがいかに人格の奥深く根をおろした症状であるかを検討する。

1) においが非常に似かよっていること

においの体験様式が似ているというべきかもしれない。彼らのいうことは、他の症状の如何に拘らず、においに関する限り、その枝葉末節にいたるまで申しあわせてように似かよっている。

「においの拡がる範囲は5米から10米位。風に流されて風下はよけいにおう。だから人ごみの中では風下に位置するようにする。だが実際にはどのようなにおいがしているのか、自分にはわからぬ時がある。においがしていることは他人の動作でわかる。鼻をすゝつたり、鼻に手をやつたり、落着きなくすわりなおしたりする。自分から離れてすわる」。「においは家庭では気にならぬ。事実、あまりにおわない。安心してゐるから」。「人前に出るとにおいが強くなる。あせつたり緊張するとよけいにおう」更に「外からのにおい、例えば煙草のけむり、落葉たかくおり、他人の体臭などがぐと、自分のにおいは一層つよくなる」というような独特な体験も非常によくみられる症状である。このように、におうという症状がそれに伴う症状、経過の如何に拘らずその細部にいたるまで広範囲に酷似しているという有様はちようどにおいという樹木がにおいの枝や葉を大きく八方にひろげているようである。

2) 恒常不変、頑固な症状であること

「私はにおう」という確信は強固であり、治療は極めて困難で種々の身体的或は心理的療法は殆ど効果がない。そして、慢性患者の多くが「においはよくもならず、悪くもならず、殆ど同じようににおいつづけている」と述べるように変動のすくない症状である。単一症候性に長い間、においの症状だけで経過する傾向があり、容易には他の症状と入れかわつたり、他の症状を随伴するようにはならない。におい以外の内容をもつた症状に発展する場合には同時に人格のかなり深い層での変動を伴ってくる。即ち、それまでなんとか保たれていた人格とか社会性がにおいの症状の変遷と共にくづれていくという傾向である。これも又、においの症状の根深さを示していると思われる。

3) この患者たちが独特な人あたりのよさをもっていること

患者の臨床的診断はどの症例においても非常に困難である。診断に際し常に問題になるのがこの全体の印象である。その人あたりは独特で各例に驚く程共通したなものがある。病的体験内容、崩れた生活様式などからおそらく精神分裂病だろうと思われる例でもそのやわらかな人あたりのよさからどうしても診断を保留せざるを得ないという例が多い。その全体の印象をひからびた形容詞で言いあらわすことは困難であるが「かたくなく、冷くなく、同調的で、実に人なつこく、親しみやすい」とでもいふ得よう。この点、次のことは傾向としてみられるに過ぎないが重要である。即ち、同じくにおいに悩むにしても、そのにおいが自分から生々しく発散しているという体験をもっている患者はど人あたりのよさは目立ち、そのにおいが稀薄で「まわりの人がわざとあてつけに鼻をならしている」というような外から自分への被害的傾向の加わっているものほどつめたさが目立つてくるということである。異常体験の内容としてのにおいが人間の全体的な印象とこのように密接な関係があるということは、たとえそれが印象に過ぎないとしても、軽視することの出来ないものである。

以上、これらの患者にはその随伴症状、経過の如何に拘らず2,3の独特な共通点がみられ、このにおいの症状がそれ自体、人格のかなり深い層にねざしていると思われることを述べた。これは勿論、実際に多くの症例について尙検討されるべきことである。こゝではたゞひとつの出発点として、人間存在のかなり深い所に既に「私は嫌なにおいを発散させている」という症状を規定するなものがあるのではないかという問題を提起すると定める。

この問いに答えるためにさまざまな立場、方法がある。生物学的、身体医学的追求は勿論必要である。だが私はあまりにも機械論的な立場に満足することは出来ない。においの精神病理学的領域自体尙全く暗闇であるからである。例えばわれわれの当面している症状が幻覚か妄想かについても、幻視、幻聴から得た概念からは正しく論じつくせないと思う。私はかゝる先入見を排して、においそのものにむかおうと思う。なによりも先づ直接的に彼の悩むにおいをそのあるがまゝに理解しようと思う。それは人間存在の深淵にそのにおいの源をかぎつけようとするのである。

方 法 論

私はひとりの人間を描きださなければならない。しか

し、私がひとりの人間を歴史的存在として深くその本来性、全体性においてえがこうとする時、えがかれたものは私の実存の地平にうかびあがつたひとつの人間像にすぎない。あらゆる努力をはらい出来るだけその人間像があるまゝに描きだそうとしても、作りあげられた人間像はその時々私の人間学的態度によつて変化する。「歴史はつねに書きかえられる」ということは Binswanger も指摘している通りである。それ故、人間存在の本質に方向づけられるというこの人間学的研究において、まづ問題にされるのは私自身の人間学である。

私は現存在の可能性としての超越について次のように話をすゝめることが出来る。ある男が自殺しかゝつているとしよう。今死のうとする彼にとつては髪毛の乱れも、胃に癌があるということも、子供が怪我をしたのだということもどうでもいゝことなのである。だれか彼を呼びとめて彼が自殺を断念したとする。子供を思いだし、家にかえつて手当をしてやろう。自分は髪をあらつて思い切つて胃の手術をうけようと決心する。その時、死へとあゆみつゞけるものゝ有限なる時間性がすべてを規定する。彼が再び生きようと決意をする時、子供や薬瓶や病院が意味をもち、関係をもち、そこに世界が生れてくる。だが若し彼が手術はなんとかうまくいくだろうというようなあいまいさの中に安住するとしたらその時彼はまぬかれることの出来ない自分の死をわすれ、人間の本来性を喪失して、平均的日常性におちこんでいるのである。たとえ子供や薬瓶や病院の世界がいかに親しみなれたものであろうとも、それでは彼は事物的に世界内部的な存在者であるにとゞまつている。現存在の存在そのものは忘却されているのではなからうか。失われた存在をとりもどすために、彼はこの日常化された世界を超越しなければならない。この超越において、彼が日常身近かなれ親しんでいたものゝ全体は消えてゆき、彼は何の手懸りもない無の深淵に投げだされる。この無の中に、存在の明るみに照しだされて、あらわになるものが世界であり《現》である。このように超越的世界内存在は世界を超えて無のうちに世界にかえりくるといえる。それは又、刻々と死にあゆみつゞける存在として逃れることの出来ない死をつねにみづからひきうけることによつて「死にかゝる存在」であることである。

だがある人間の存在をこのような哲学用語の羅列でいあらわすことが出来るだろうか。不可能なことである。用語の羅列は存在に背をむけることである。存在に言葉の貼り札をすることによつて存在を喪失すること

ある。存在という言葉を用いることではなく、大切なことは存在そのものをいゝあらわすことである。どうすればよいのか。たゞ症例をそのあるがまゝに生き生きと描きだし、えがかれた症例をして語らしめようとする所に道は拓けると思う。あたかも詩人が存在に耳をかたむけ、存在の言葉をきゝ、時をみのらせるように、ひたすら症例を記載し、その症例の明るみに照しだされ、この明るみの中にうかびあがつてくる珠玉のような「存在の言葉」に耳をかたむけることが私の道である。以下、3例の症例研究も人間をそのあるがまゝにうきあがらせようとする努力につきる。それによつて現存在の深淵から発散するであろうにおいを嗅ぎ、においの意味を問うことが出来ると思うからである。

症 例 研 究

できるだけ彼等の生活の中に入ろうとしたはじめの意図は十分に果せなかつた。いきおい私の研究は患者との面接におもきがおかれている。面接は面接室でむかい合つてすわり、出来るだけ時間をかけて話し合うことを主眼とした。記録を重んじ、会話を逐語的に病歴に記載する方法をとつたために、医師がはなしかけることは制限された。たゞねられても「私にはにおわない」とはあまりはつきり答えないようにして、むしろどのようなにおいに悩んでいるのかを理解するよう努力した。人間としての精神的苦悩が自発的に口にされるような場合は出来るだけそのような話題を続けるように心がけ、時には控え目にではあるがより本質的なものへと討論することはあつた。勿論、その間もつとも適当と思われる生物学的治療は躊躇なく施行するようにした。

第 1 例

R.K. 22才 女 工員

〔家族歴〕52才の父は小柄な大工職人。普段は無口で、孤独、温和しい人物である。しかし、決して人となじめず、頑固で怒りつぽく、喧嘩早いために一定の雇い主につくことが出来ず貧しい日雇大工に甘んじている。家では一層無口で暗い我儘な暴君である。困つた大酒家で酔うと必ず兇暴になり、猥せつなことをいう。吠えたり、どなつたり、母をぶつたり、けつたりする。出ている瀬戸物を全部こわす。酒をのんでは胃をいため、怪我をし、気がむいた仕事がないと何日でもごろごろしている。自分でも、人に言われたごく些細なことを苦にして朝がたまで眼れぬことは珍しくないという。父の兄にも同じような大酒乱の人があり、人夫風で現在行方不明である。

母は46才、明るく社交的であり、家庭でも子供と一緒にふざけあそぶというたち、しかし、根は非常に神経質であり、小学校の頃、何んでも畳の上に落ちている黒いものにひどい恐怖を抱いた時期があり、現在でも僅かな病気を苦にして心配のあまりやせてしまうことがしばしばあるという。見た所温和しいが仲々きかない。しぶとい、勝気な女であると患者の父はのべている。母の兄で酒のみ川におちて死んだ人がある。

〔生活歴〕昭和13年、現住所に生れ、そこで育つた。出産発育は正常であり、麻疹、百日咳のほかは著患をしない。5人兄弟の長姉で弟3人、妹1人がある。小さい時から男の子のような性質で人形などもつたことがない。ソフトボールを好み、棒をもつては男の子を追いかけてまわしていた。強情で、意地つぱりで、くやしがり屋であつた。機嫌がいゝとすぐにふざけ、慰安会などに出演して落語をやつたりする。自分からつきあつたり、友達の所へ出かけてゆくことはないが、人に好かれ目立つタイプであつた。

幼少時、生活は貧しかつた。小学校時代に5年間、働く父だけを東京に残して母及び弟たちと新潟に疎開したが、当時既に酒にふけていた父からの仕送りはまゝならず生活は最低であつた。皆が5年ぶりに東京にかえつた時も父は酒のために怪我をしていた。その後もずっと続いた兇暴で破壊的な父の酒乱は彼女を最も苦しめる場面であつた。だまつてなぐられ続ける母をかばいながら、長女である彼女は父を鬼だとのゝしつた。そうでなくても家人とうちとけぬ父は完全に孤立し、子供たちは皆母に味方した。治療の場で、はつきりしてきた彼女の父への愛については後述する。

中学卒業後すぐに体温計製作工場の女工となつた。

〔現病歴〕患者から：「昭和33年2月頃、切符をもらったのでひとりで映画を見にいった。隣の若い男に手を握られた。はなしでもはなしでも握ろうとする。立つていたのだが前にゆくと前にくる。疲れてしやがむとむこもうもしやがむ。たつとたつ。うしろのドアからでてゆくと又ついてくる。どこへいつてもついてくる。ひとまわりまわつてむこうの隅に行つた。その時、お臀の所から水みたいなものがでて来た。便のようなものが、ぐしやぐしやしていた。肛門の乾き気がなく濡れているような……。男はお臀をもんだり、さすつたりした。やられている最中に『あら、私くさいわ、じめじめしているから私だわ』と思つた。ほかの方にもいつてもぶーんとおつてくる。映画館の中で近くにいる男の人が何本も煙草をすつている。帰りの電車の中でもお臀がぐちゃぐちゃ

した。男の人を見るとでてくるようになった」。以上は入院中、彼女がこれがなければ病気にはならなかつたといつて述べた言葉である。

母から：丁度その昭和33年2月頃から「小便がくさい。薬をのめば薬のにおい。漬物をたべれば漬物のにおいがする。変だ。変だ」といつていた。5月になり「肛門に虫がいる」とか「会社で、くさいねえ、変なおいがするねなどといつている」といゝ、においを防ごうと肛門に絆創膏をはつたりした。しかしそれもすぐはがれてしまい、泣き泣き会社を休むようになった。こののために、あちこちの内科医、外科医を訪れて腹膜炎の疑いで2カ月近く入院もした。便通を苦し、頑張つて1日に3回も4回も兎の糞のような大便をした。「ガスじやない。液がでてくさいのだ」といつていた。9月に一時出勤したが1週間後には「又においが始つた。皆がくさいとか、くさくないとか、窓をあけたり閉めたりして私のことで喧嘩している。私さえないなればいゝ」といゝ、それつきり会社に行かない。その後も病院を転々とした。しかし症状は変りなく、家に閉じこもり客がくるとかくれる。家事も自分のことだけをやる程度だつた。こうして昭和34年4月、順天堂神経科に入院した。

1. 現象学的記述

彼女は母と来院した。二人は姉妹同志のように仲がよさそうに見えた。明るくさつぱりして、なんでもはきはき答えた。「くさくなつては人に悪いと思つて」といゝながら涙をながす時、彼女の人間的なあたゝかさといじらしさが感じられた。入院して11カ月間、彼女は存分に我儘もいゝ無理な要求もして、通らぬとすぐに仏頂面をしてとりつく島もない程であつた。それにも拘らず、彼女は最後まで医師を信じ、決して背をむけようとはしなかつた。精一杯に生きてゆこうとする態度が好感を与えた。

では彼女はどのようなにおいに悩んでいたか、それを出来るだけ具体的に彼女の言葉に従つて記載する。

i) どんなにおいか：自分で、はつきりにおう。風下に行くとおう。食べ物と関係あるようで、普通はこやしのようなにおい。漬物をたべればどぶくさいにおい。牛乳をのめば赤ちやんのうんこのようなにおい、薬をのめば薬のにおいがする肛門からでる。肛門がぼそぼそしてくる。肛門が動悸がうつているようにくつくつとでる。おできができてぶつぶつしているようだ。においのとゞく範囲は風によつてちがう。電車の中では風通しのいゝ場所をえらぶ。病室で窓ぎわのベットに移つたら、

においが入口の方に溜つた。ドアをあけるとにおいは廊下に流れでる。いやなのは朝とねる時、風はないし、においがひと塊りにかたまっているよう。わたしのねているまわりにふわふわしている。蠅がよく私の所にとんでくる。「蠅はそういう所によくよるんですからねえ」。

ii) いつひどくにおうか：人ごみとか、緊張するとなる。混んでいるとよけいにくさみを感じずる。将棋したり、ギターを弾いたりあせつてくるとなる。変な本をよんだり、誰か殺されるというような本をよむとなる。道路工事をみていた。あれが足におちたらと思うとぴんと肛門の方にきちやう。男の人がいやらしい話をしていた時になった。その時、自分でおいがしたが、周りの人にはくさい影響を与えなかつた。雨の日はよくない。ほかのにおい、例えば自動車のガソリンのにおいなどがぐと自分もおいをだしてくる。においをわすれていると全然におわない。まわりに人がいないと安心感があるからでない。

iii) だれにおうか：自分もくさいから人もくさいのかなあとみると、仕事で中ずうことはないのに煙草を何本もすっている。やはりわたしはくさいのだなあとと思う。鼻をおさえたり、こすつたり、びくびくさせたり、鼻をならす。いゝ顔をしない。坐りなおす。このようにするのは主に男の人かもしれない。しかし、偶然わたしのそばにきた人であつて、とくにわたしに関心をもつた人ではない。女の人もある。

2. におっているという世界

このにおいは自分にもにおうというのが普通の幻臭とは些か異なるものである。それはどこからともなくにおってくる不気味なにおいではない。逆に自分の内から外へ拡がってゆくにおいである。問題になるのは自分の鼻を刺戟するにおいではなく、むしろ自分のまわりによどみたゞよう生々しいにおいの塊である。それ故に他人の動作が気になるにしても、それは自分を貫ぬき見とおす他者の、不気味な空洞のような眼差しではない。「においがする。蠅があつまってくる。人は煙草をすっている」という話にどこか気安さがあり、こつけいささえあるのはこの他者の不気味な眼差しがないからだと思う。彼女にとってまわりの人たちはさしあたつて敵ではない。人々が鼻をこするの、蠅があつまるのと同じように、においがしているのだから当然のことなのである。そこには「なにかあるな！」という不気味な、規定することの出来ない、対象のない不安はない。すべては既にあらかじめにおうということで意味づけられ、把握されている。本来はこの不気味さ(Unheimlichkeit)において

被投的世界内存在である現存在の無が不安として開示されるのであるが、彼女はむしろ親しみ住みついている。におっている世界にはそのような身近さがある。道路工事の鶴はし、気味の悪い本、男のいやらしい話、雨ふりの天気等、あらゆるものがびつたりと自分に接してそこには距離がない。もう少し離れ、人間としての距離をたもっていることは出来ないのだろうか。なぜなら、死にかゝわる存在としての人間はもつと距離的な存在である。実存の深淵に距てられて孤立している。私は彼女に次のように問いたいのである。「貴女はどうしてそんなににおいなどに気をとられているのか、いづれは別れなければならない人々に、なぜそんなに嫌われまいとし、近づこうとするのか。それともあなただけはいつまでも死なないともいいたいのか」と。ジャングルに逃げこんだ敗残の兵士が敵の軍用犬にかぎつかれるのをおそれて、どれほど糞尿の処理に気をくばつたかは有名な話である。生きようとすればするほど敵はますます近く、糞尿はますます強くなるのである。これは単なるたとえではあるが、人間において、死の切迫と、それに対して生きようとする態度が人間の距離を規定し、ひいては人間のはなつたにおいのつよさをも規定するのではないかという問題をなげかけてくれる。

これまでにおっているという世界が他者にうばいとられた不気味な世界ではなく、彼女がそこに住みつきなれ親しんでいる世界であるとのべ、それが人間として本来あるべき距離をうしなつた距離のない世界であることを示した。そしてそれを規定するものが「死にかゝわる存在」の開示如何にあるのではないかということにふれた。

3. においの消滅と父への態度

「父にもつと優しくしてあげよう。お父さんとよんであげよう」「お父さんを悪くしているのは私だ。私からよくならないとお父さんがよくならない。彼女がこのような優しい言葉を口にするようになったのは、入院して8、9カ月もたつてからである。それまでは父のことを話したがらず、それが話題になると目立つて落着きがなくなり、投げやりな、捨て鉢な態度になった。「お父さんがなおれば自分だつてなおる。おなかのはるのも、肛門がうごくのも、におうのもなおる」といつていた。それが自分の気持ちからよくしていかなければ駄目だと思うようになり、におうという症状をより自己分析するようになった。極めて頑固だつたにおいが霧がはれるように消えていつたのはその頃である。肛門もうごかなくなつたし、電車でも連結器の所にのらなくてすむようにな

り、パーマにも行けるようになった。かつて、においが
あるために人との交わりが困難であるといっていたのが
逆になった。「においの原因というか、肛門のうごくこ
との原因がつかめた。原因は気持。その気持さえおこさ
なければ大丈夫だと思う。人々が面白おかしく話してい
ると気があらくなり、心が動かされる。そして肛門が高
鳴るんです。自分で仲間入りしようと思つても入れない。
人と交わりがないとだめなんです。家では仲間には
いれる。だけどわたしがゆくと悪いような、こわすよう
な気がして入れない。わたしがその雰囲気というものを
壊してしまわうらしい。お父さんとうちの人との関係を壊
してしまう。」この頃から、外泊して父が相変わらず些細
なことを苦にして何日も仕事をやすみ、ごろごろしてい
るのをみても、病院に帰つて再びにおいが強くなること
もなくなった。以前にはこういう時、きまつてにおいが
ひどくなった。彼女は次のようにいつた。「うちにはい
ると兄弟たちも同じ思いをしているのだからいゝが、父
を離れるとまざまざと絵のようにうかんできてたまらな
く癪にさわる。しかし、同時に可哀想になる。何の慰み
も趣味も持つていないのだから、いゝたいことがいえ
ず、ちよつと人にいわれたことを気にする。私と同じで
す。なんとかの穴が小さいんです」。

こうして約3年間つづいたにおいが、全く消褪したの
であるが、当時1カ月程みられた次のような状態は注目
に価する。目立つて日数が少く、しおらしくなり、やゝ
沈んでみえた。「徐々にですけどにおいが消えると共に、
なにもかも皆一緒に消えているのに気がついた。におい
が消え、肛門のうごきがなくなり、何もしたくなくなつ
た。たゞぼう然として、緊張もしない。あせりもしない。
自然のまんまです。テレビみるのも人と話すのもし
やになつた。頭に入らないんです。ちよつとねていても
涙が出てくるような。なんかもう寂しいような。憂うつ
というんじやなく、みんないなくなつちやつたようなん
です」。

このように、においと共にすべてが消えてしまったあ
と、やがて結婚とか就職とか、建設としての未来を地道
に考えるようになってきた。それは彼女がかつてにおつ
ている時にうたつた詩

風よふけ、私の心に
風よふけ、へやの中に
春風にふかれて、あの雲へ
ふけよふけ、いとしの風よ

「自分の苦しみ、自分のくさい空気を空に訴えるん
です」とうたつた詩の如く、いたづらにひろがり消えてゆ

くエーテルの如き未来ではなかつた。

4. においの消褪と距離的な存在

父への態度の変化、においの消褪、更にあらゆるもの
が消えたこと、これらがいち時にやつてきて、そのあと
に長い安定した期間がみられることは重要であり、この
現象の意味する所をみのがすことは出来ない。

i) 父への態度： それまで彼女はことごとくに父に反撥
し、抵抗し、はなしかけられても仏頂面をするばかりで
あつた。父との交わりはなかつた。しかし、これは父か
ら離れているということではない。孤立した父ではあつ
たが家庭は父で満ちていた。父のかもしだす雰囲気、父
の問題でみちていた。彼女は父に住みつき、父に接し、
父と共にうごいていた。「父にうごかされて肛門にひゞ
く」という言葉にもそれが示されている。それがどのよ
うに 変つたのか。「父がなれば自分もなおる だろう」
という態度が「まづわたしをよくしていかなばならな
い」という態度にかわつた。彼女は父を離れた。父も又
可哀想だとおもうことによつて、父を無に帰せしめた。
父を超越した。存在者として父を超えて父の存在へとむ
かつた。父の愛を求めるかわりに父を愛するようになった。
それは父の存在へむかうことであり、孤立した父の
寂しさへむかうことである。

「人間は実存的な超越として 可能性へと飛翔しつゝ、
距離的な存在 Ein Wesen der Ferne である。現存在
がその超越に於いて一切の存在物との間に設けるところ
の根源的な距離を通じてのみ事物への真実の接近が現存
在のうちに立ち昇ってくる……。たゞ孤独なる魂のみが
人と人との間柄的存在の意義を真に自覚しうる」⁴⁾

この美しい言葉が父を離れ、父に近づいていつた彼女
の姿を浮彫りにしてくれる。

ii) あらゆるものが消えたこと： 無に帰せられたもの
は父ばかりではない。あらゆるものが消えてしまった。
「人さえ皆いなくなつてしまつたようだ」という。だが
彼女もいうように、これは憂うつではない。彼女の態度
には落着いたやすらぎがあつた。むしろ寂寥感というべ
きであろう。しかし、この不安は実存への道である。な
にもかもが消えてしまった彼女は無の深淵になげだされ
ている。これはすでに現存在の超越である。そこにおい
て存在するものゝ全体が超えられ、今まで身近かになれ
親しんでいたすべてのものが自分から消えしりぞいて無
のまつ只中になげだされている。においはこのようにし
て消えた。この無の中にはじめてうかびあがつてくるの
が実存の世界である。寂しく不安ではあるがその不安に
は静かなやすらぎがあつた。

註 4) 参考文献 10) 161 頁

かつてにおつていた時、彼女があれほど親しみ、住みついていた、不安も、不気味さもない世界は、根源的な距離のない世界であつた。

第 2 例

Y.H. 18才 女 学 生

〔遺伝歴〕 父系に天才肌の変人、芸術家が多い。祖母は酒屋の長女だつたが、器用で新案気狂いといわれた。父の弟に抽象画をかく絵かきがある。全く没社会的な変人であり「凡人は天才の面倒をみる義務がある」といつて借りた金もかえさない。この人のひとり娘は学令に達しても全然学校にゆきたがらない。父の妹には内向的な性格のパレリーナーがあり、又語学が達者で新劇をやり帽子デザイナーをやり華奢で結核で死亡した人がある。

母系に精神疾患はないという。

〔家族及び生活歴〕 父は大きな下着会社の創設者である。極端に小心、生真面目で几帳面であつた。母は独特な雰囲気をもつた性格の持主である。一見非常に明るく、快活であり、娘たちのよき理解者、よき先輩のように振舞うが、型にはまつており、全体として相手を非常にかたくなしくさせ、すきのない、冷い、かたい殻をもつた複雑な性格である。

同胞は5人ですべて女。患者は4番目である。5人とも頭はいゝ。明朗で、社交的にみえるが性格は皆地味で窮屈でかたいという。特に2番目の姉は病的に内向的で、高校時代アチーブメントテストを「こんなもので人間を評価することには堪えられない」とどうしてもうけず、又「女だけの学校はいやだ。男子と一緒にの学校で発展したい」と強引に転校した。

患者は昭和16年東京に生れた。小さい時から病気ひとつせず、5人の姉妹の中でも最も素直で温和しく静かで一番手のかゝらない子供だつた。小学校はずつと首席であり、3年の時、成績優秀でだれとでも仲良くすることによって全校で3人のうちのひとりに選ばれて表彰された。母によれば皆からは偶像視されていたし、家庭でも一番期待されていたという。

勿論、5人の姉妹たちの間には暗黙の烈しい競争があつたろう。しかし一応平和であつた。その家庭に大きな不幸が訪れたのは彼女の小学校4年の頃からである。父が女事務員をかこい、数百万円を投じて豪壮な妾宅をたてた。実はその頃から父の進行麻痺がはじまつていたのである。それとはしらず、母は烈しく見苦しい程に悩みぬいたのだという。父はひと月の半分は家をあけた。帰つてくると、ある時は幼な子のようにわび、ある時は性

的な卑猥なことを口にしてさわぎ、喧嘩が絶えなかつた。彼女は当時のことを思いだして「喧嘩はおもに夜中、隣りの部屋だつた。つかみ合いの喧嘩もあつた。姉たちは平気でみていたが自分には出来なかつた。姉妹の中で、私が一番よく覚えているのではないか」という。母は悩み、神経衰弱になり、ひそかに神経科医院に通つて電気衝撃療法をうけた。父の病状は悪化し順天堂病院に入院したが、衰弱はつり、退院後間もなく死亡した。彼女が中学校1年6月のことである。彼女は父を「とても良い人でした。人間らしくてあたゝかい人でした。とてもなつかしい」といつて慕い。「あの時、母がもう少し強情でなく、あやまればよかつたのに」と母をうらんでいる。「中学時代は一番いやな時代だつた」と彼女はいう。入学する時に引越したため小学校時代からの友達は一ひとりもなく孤立した。6月に父が死んでから、つぶれかけた会社を再建するために母は重役となり、毎日夜遅くまで会社にいなければならなくなつた。「その頃から母には相談しないというくせがついた」という。8月、臨海学校で初潮、予備知識もなくこわかつた。「その頃から、既に自意識過剰だつた」と彼女はいう。「母にも子供らしくないといわれたし、ひとつひとつ自分の動作がおかしいんじゃないかとすごく気をつかつた。ほかの人たちを意識して、自分のことがいえなかつた。」においはじめたのはこの中学1年の3学期からである。

「高校の頃はそれほど嫌な時代ではなかつた。だれとでも話しあえなくてはいけないと悟り、努力して女友達とは話せるようになった。たゞ男の子に話しかけることが出来なかつた」と彼女は涙ぐむ。彼女の葬式の日、あつまつた友人たちの中で、ある友達は非常に優しい、親切な、明るい人だつたといゝ、又ある友達は、いつも折目正しく胸をあわせ中に入つてゆけない人だつたといつていた。

〔現病歴〕 昭和30年2月、中学1年の3学期、教室でうしろの男の子に大きい声でくさいといわれた。その時は事実おならをしてくさかつた。その頃から便秘が苦になり、毎日教室でおならのにおいを気にするようになった。他人の動作で何となく、におつていることが感じられる。男の子などはつきりくさいという時もあるが、むしろ皆遠慮していわないという雰囲気がある。ガスが出たという感じがする時としない時があるが、におつて人に注意される。時に自分でもそのにおいを感ずる。普通の人のするガスのにおいとは全然ちがつたにおいである。中学時代、母と共に便秘を訴えて保健所にいつたことがある。高校に入つてから、教室以外でも映画館とか

人のあつまるところでそういう風になるようになった。ひとりでいるといふが、ちよつとうしろに人が来たりすると下腹にガスがたまってくる。そして実際にくさい。何となく顔が赤くなり自分がしたということを周りに知らせようになつてしまう。立つているといふ、電車の中でも立つているとなんでもないがすわっている時になる。しかし、朝礼の時など立つていてもなる。家では安心してゐるから気にならない。おならがでてしまうがしきりに母に訴えて、病院を転々とした。塩水をのむ、冷水をのむ便通によいといわれることは何でも試みた。

大学進学のために夜ふけまで勉強していながら学校にはあまりゆきながら、上位だった成績が高校2年には中位におちた。家庭の事情でもあるのかと母が学校で注意されたことがある。ちょうど成績が急に悪くなつたその1年間、家にひとつ年上の女中がいた。しかし、この気さくで、派手ずきで、社交的な女中を彼女は極端に嫌つた。「声をきくだけでも勉強が手につかない。とりかえてほしい」と何回も母の机の上に置手紙をした。その執ようさのために、1年の後、遂に女中を蹴にせざるを得なかつたが、母によれば元来こんな無理をいう性格ではなく、この無理自体すでに病的だつた。

1. においの消褪と自殺企図

初診は昭和34年8月22日、物静かな、落着いて上品な女学生であつた。「最近も実際に、におっている。においを感じるからそう思う。緊張した時などかなり強くにおう。下腹にガスがたまつた感じがするから腸からのものと思う」という訴えであつた。

i) においの消褪： 初診当時、既に「このにおいは体の調子ではなく、神経的なものとも思う。内科的なものならどこにいてもにおう筈だ」という洞察をもちはじめていた。だからこそ自分ひとりすゝんで神経科を訪れたのだという。Chlorpromazine を服用しつゝ外来にかよつていたが、日を追つてこの洞察は深められ、においも次第に消えていつた。10月下旬には「大分楽になつた。周囲もあまり気にならない。気にするとまだおなかで変になるが実際にあまり出ていないんじゃないかという気持ちがつよい」「前も必要以上に考えていたと思う」という迄になつた。後述する如く、次第に自分について語ることをにきうようになつたのだが、当時は尙、自分の性格についても卒直にのべた。「だれかと一緒にいても自分に対する気持ちよりなるべく人に迷惑をかけたくない、退屈させてはいけな、楽しくしてあげたいという気持ちがつよい。それで人からみると窮屈に思えるらしい」といつていた。これは彼女の他人に対するやわらかな態

度と共に、におうという悩みのより根源的な意味を暗示する重要な言葉である。

ii) 自殺企図： だがこのにおいの消褪と平行するかの如く、もうひとつのより深刻な苦悩が芽ばえていたのである。後日彼女が述べた所によると、9月頃から生きていこうという意欲がなくなり、死んだ方が楽だという気持ちが消しがたいものとなつていたのである。初診当時はまだにおいさえ消えれば行動もひろく、気分も楽になるといつていた。それがにおいの消褪と共に顔色も悪くなり、不眠がつり、やせてきたのである。10月下旬、外来では「自分がいやになつた。段々望みが小さくなつて勉強するのに根気がつづかなくなつた」と述べてゐる。見るべき動機もなく突如自宅の台所で自殺を試みたのはそれから旬日後のことである。11月5日、順天堂神経科に入院、自殺状況について彼女は次のように述べてゐる。

「ガスをつけた時は全然そういう気持はなかつた。何かぼやつとして、おとといの朝はすぐく死にたい気持ちがあつた。うちのこと、お母さんやお姉さんのことを考えると迷惑かけてとても死ねないと思つた。きのう丁度、学校が休だつたから、お姉さんがでていつて、ちよつと死ぬことを考えた。すこし勉強した。勉強したらすこしでも明るくなると思つて。食事して、お茶をのんで、ちよつとお勝手にいつたもんですから、ガスつけて壁によりかゝつた。はじめ立つていた。頭がおもくなつたので立ておれなかつた。椅子をもつてきてすわり、台の上にうつぶせになつた。別に何も考えなかつた。からつとしていたのかもしれない。途中で気がついた。ひらき戸の把手がみえた。そこでゆかの上に眠つてゐるのが解つたので椅子の上にすわりなおした。それからがわからなくなつた。」

この第1回自殺企図後、においは完全に消えた。たづねても「においのことは、むしろ先生の方が心配なさつてゐる。大して問題ではないのです。もう全然気にしてゐない。おなかの調子もなりました」とほほえみ、「自殺しようとしたのはにおいとは全然関係がない。なんだか自分に自信がなくなり、気が沈みがちだつたんです」と答えた。

iii) 自分を閉してしまつたこと： 自殺企図後においは消えた。それと共に目立つて言葉少くなつてゐた。雑談には自然に应付でき、にこやかにこちらの話もよくきいて、態度も非常に柔かではあつたが、話題が少しでも彼女自身のことにふれようとすると途端に貝のように自分をとざし体をかたくした。「自分のことはお話しした

くない」と頑強に口を閉ざし近づくすべはなかつた。やつと聞きえたことを総合すると「自分がどういう人間なのかわからないでこまっている。夜、眠れないで考えるのは自分の性格のこと。自分をうちこめる趣味がもてず、本当に話しあえる人のない自分の性格のこと。もつと自分を離れることが出来たら、自分が一番重荷」というようなことであつた。死に切迫して存在は重く、彼女は超越において真の自己性を獲得する以外に救いのない実存の深淵に直面していたのであろう。私と彼女をへだてていたものもぼつかりあいたこの実存の深淵だつたと思われる。

2. においと共に消えたものの全体

かつてそのためにあれほど悩み、病院を転々とし、塩水や冷水までのんだにおいが消えうせてゆくと共に、においさえ消えればといつて希望に満ちていた将来も消えた。きわだつてすぐれた子として偶像視されていたという自分への自信もきえた。かつて確かであつた自分自身、どういう人間なのか、それさえつかめなくなつた。そしてまるで平坦な道を歩いて行くのかの如く、死の壁を越えようとしたのである。死の前に立つて、母も姉も学校も、そして又自分もなく、世界は無に帰していたのである。

においが消えるということと、今まで存在していた筈のものすべてが消えたということをより全体として把握するために、私は次のような比喩を用いる。勿論、比喩を用いることは横道にそれることであり、彼女の本質を問うことではない。

i) 偶像的存在： 彼女は学校で偶像的存在であつた。偶像は単なる木の切れはしではない。堂内に安置されている時、偶像はそのお堂一杯にみちている。独自の雰囲気をお堂一杯にかもしだしている。教室で偶像的存在である彼女は片隅にすわっているだけではない。じつとしても、何もいわなくても彼女はその教室一杯にみちている。即ち、彼女が偶像的存在である限り、既に彼女は独自の雰囲気、いわば自分のにおいを発散させているといえる。

ii) 偶像そのものは存在しない： 偶像は偶像視なくして偶像ではありえない。その時それは単なる木の切れはしでしかない。偶像は偶像視されつゝ自分の雰囲気をまわり一杯にかもしだすことによつて偶像として存在している。偶像そのものは存在しない。それ故にかゝる偶像的存在はすべて早晚、崩れおちなければならない。

「自意識過剰で自分のことよりは人のおもわくのみを考えて生きていた」という彼女は、あたかも偶像の如

く、におつていた。それは「におつているかどうかかわからぬ時がある。なんとなくにおつているような雰囲気がある」という彼女の言葉にもあらわれている。この比喩を用いることが許されるなら、消えたものは単に、においではない。偶像がほろび地におちたのである。それは自分のまわりに存在していたもの全体の破壊を意味する。においは偶像と共に消えたのである。そしてこの無の中にうかびあがつてくるものは、崇高ではあるが苦悩にみちた人間そのものである。

3. 家族の中での死

第1回自殺企図1ヵ月入院中はこともなくすぎた。むしろ失いかけていた未来にひと筋の糸を求めるかの如く受験勉強をあせり強引に退院した。だが事態は予期以上にきびしかつた。家庭がどこよりも彼女を苦しめたのである。退院後1週間は正常通り学校にいつていたがはじめて病院にきた時、にわかに堰を切つたように泣きはじめた。「よその人と競争するつもりはない。一番較べるのはうちの人です」。「家より学校の方がすごしやすい。病院がすごくなつかしい。思いきりないてみたい」と面接の間中涙を流した。その日帰宅してから後の数日間は見るに堪えない痛々しきであつたという。夜も昼も涙をながして食事拒み、たて続けに3回ガス自殺を試みた。母の部屋にねかせたが「すうつと音もなく襖をあけ夢遊病者のようにとても通れないように狭い所を肩すみからぬけてゆく。風呂場のかさぐさを開いて壁によりかかり、放心状態で声をかけても手を引張つても反応しない。表情のうごきもなく、抱きかゝえようとしても死体のようにだらんと重かつた」という。

そして昭和34年12月25日再び入院したがこの昏迷様状態は入院すると同時にとけていつた。その夜には笑顔も出て食事をとり、翌日は嘘のように元気になつた。けろりとして「家にいる時はすごくつらかつた。病院に来てすぐに変つた。家で考えていたような気持は今ちよつと思いだせない。昼も夜もわからないし、同じようだつた。いつ寝たかもわからないし、時間の経過がわからなかつた。笑い声が嫌だつた。寂しかつた。なんだかよくなると病院から追いだされそう」といつていた。

なぜ家にいる時そんなにつらかつたのか。この第2回入院直後にかいた短い手記は彼女自身が残した唯一の重要資料である。

「私は母が大嫌いだ。3番目のお姉さん」をのぞいて姉妹も皆きらいだ。皆八方美人で、ずるくて……。いつからこんな気持になつてしまつたのか、2、3年前までは家ほど住みやすいところはないと思つていたのに、それ

ほど私の物の見方がちがつてきて素直さがなくなってきたのだと思う。

「姉たちに対する劣等感もありますが妹に対する劣等感の方がつよい。容貌の点にも頭の点にも社交性に富んでいるという点にも、他人はまず妹をほめて可愛いがつて、私は行き場がなくなつてしまう。妹に対してこんな競争意識をもつなんて普通ではないと思うし、醜い恥かしい事だと思う。ですから今まで先生にも誰にも言つた事もなかつたし、そんな風にみせた事もないはずです。私には私なりの性格があるのだから自分の枠の中で無理しないで生活していけばよいのに、家にいるとどうしても家の人と接触しているうちに姉妹と自分を比べ劣等感を感じて、自分の殻の中に入りこんでしまうのです。

人のいない所にいきたい。今の環境のすべてから離れてしまいたい。もう一度自分というものを作りなおしたい。それよりも生きているのがつらい。今のような自分では将来どんなになるかしらと思う。どうしてこんなに人と一緒にいるのがいやなのだろう。私にはおよそ社交性というものがない。私がいるとまわりのなごやかな雰囲気気をこわしているようでとてもつらい。家にいても学校にいても病院にいても自分の存在というものがとても邪魔になる。姉妹に対して劣等感を感じるのもこんな性格に対してです。

病院の人たちは、私の事を何でもなさそうだしといいますが、私の自分に対する劣等意識は——主に社交性のない、傍の人たちをかたくるしくさせるような自分の性格に対してですが——中学時代からずっと続いてきたものですし、その頃から表だけでも繕おうとしてきていたので、もう慢性になつて表面には表われてこないのでしょう。そういう自分の性格なのだから無理しないで、自分は自分なりに生活すればよいと思うのですが、自分が社会から歓迎されないということはとても寂しい事です。人一倍可愛いがられたという気が強いのです。人から離れたと思う一方、誰か特定の人に思いきりたよつてしまいたいという気持もあるのです」。

家にいることがなぜそんなにつらいのか？ なぜ肉親の中でのみこんなに苦しんで自殺をくりかえすのか？ 以前は「家ほど住みやすい所はなかつた」のに、今や彼女のもつとも苦悩する所となつている。かつて、においが悩みであつた頃、それは「家では安心してゐるから気にならない」ものであつたのである。

においが消えたと同じように、すべてまわりの存在者が消えさつた今、彼女を苦しめるものは、自分が得難のしれぬものとして尙且つ存在しているということ自体で

あり、存在そのものの重みである。これは現存在の根源的な負い目としての苦悩であり、他人のいかなる庇護もそれを救い得ず、何びとにも分ち与えることの出来ない苦悩である。すべてのものが無に帰して、残された可能性は死のみであるという深淵にあつて、救いはたゞ自分の死を超えて脱我的超越存在にいたることである。真に孤独なるものとして自己性を獲得することである。彼女は出来ないこととは知りつゝ「人のいない所にいきたい。環境のすべてから離れてしまいたい。もう一度自分というものを作りなおしたい」といつているがこれは実存的な死を意味する。救いは「自分がいるとまわりの雰囲気気をこわす」というような本源的な負い目が死によつてあがなわれることである。死ぬことである。

そして家庭において彼女がかくも烈しく死を求めたのは、肉親の中にある時にこそこの事実的存在としての存在の重みはまし、存在は烈しくぶつかり合うからであらう。やゝもすれば自分の無のなかに遠慮なく入りこもうとする肉親の中にあつて、真に孤独であることは困難である。既に如何ともしがたい根源的な負い目にあえぐものにとつて、肉親のべたついた情愛は嫌悪すべきものである。ここで私は、むしろ、Camus が「健康なひととは誰でも多少とも愛する人の死を期待している⁵⁾」といつているのが正当であると思う。彼女も又、愛する人々の中にあつて死を直視することを要求されたのであらう。「あたかも幽霊のように音もなく襖をあけ、通りぬけ、放心状態で反応もなくだらんと死体のようにおもかつた」という彼女はすでに死んでゐたといえよう。生きながら自分の死を死のうとすることはたゞこのような型でのみ可能だつたのだろうか。

5. 死

以下は本当に自殺を遂げる迄の経過である。第2回入院直後、持続睡眠療法を施行、ひきつゞき Chlorpromazine 等の薬物を使用しつゝ面接をつづけた。血色もよくなり体重もました。病棟内での生活も活潑でほかの患者たちともよくつきあつてゐた。たゞかなり目立つた勝気さ、自尊心の強さ、自己中心的傾向が附添看護婦などごく身近かな人をこもらせていた。主治医には心からたよつてゐる様子であつた。

「今まで20年ほどがずいぶん長かつたのにこれから2倍もあると思うとうんざりする。『なんか一生残るようなものをやりたい。学校はもういい。そんなに望みは大きくない。おさんどんでもいい』といつて微笑むようになつた。それは地道な未来への建設だつたのだろう。桜の咲く頃には退院できると主治医がいうように

註 5) Camus, A: L' Etranger この小説の主人公は母の死後間もなく人を殺し処刑される。これは又死における母との合一でもあつた。

なつたのは2月頃からである。

しかし相変らず自分のことを話しながらなかつた。特に自分の過去の話を書き終えた。自分の病歴をきらつて「焼いてしまうわけにいかないかしら」とたびたび口にし、彼女の前で病歴に記載することは拒絶された。だが非常によいきゝ手であり、又話題が第3者のことになると見ちがえるように活潑にしゃべり、声をあげてわらつた。

3月に入り外泊も許された。ついでに卒業式に出席した時は特によきこび、謝恩会などその一部始終を話してくれた。だが病状はその頃から急激に悪化した。一時禁止していた母との面会や外泊が明らかに病状をわるくした。2回目に外泊した時は夜も昼も涙ぐみ、自室のベッドを離れずどんなにすゝめても食事を口にしない。それでいて、3番目の姉と病院にかえる途中から嘘のように元気になり病室の患者たちのことを面白そうに話してきかせたという。病室生活は尙殆ど異常は認められないのに、診察室では目立って打ちしおれ、涙脆く、話しかけてもぼんやり考えていることが多くなった。「なんかすごくぼんやりしている。しゃべるまでになつていないというのか。だがはつきりさせることも面倒くさい。つらくない。ぼんやりしていると楽」「私がひとりであるみたい。言葉でいえないようなもやもやしたものを考えている」「空っぽになりそうな気がする。完全になつちやつたら気持ちがいいかもしれない」というように言葉も思考も次第にうすれているようにみえた。死ぬ数日前の病歴の一部は次のようである。

怖いことは？ ありません

死にたくなる？ いゝえ

つらくないの？ そこまで考えない

1日が長い？ <笑う>

<外で鐘がなる>

あの鐘？ いゝ音だわ……

ニコライ堂

何か感ずる？ <茫然と中空をみつめているよう>

病室では？ 普通にしゃべってます

こゝでは？ なんかしゃべらなくても安心しておれる
当然おぼえている筈のことも「そんなことあつたかしら」といゝ、過去とのつながりもなく時間が過ぎてゆくのをむしろ茫然と味わっているように感じられた。消えない筈の過去さえが消えうすれているようであつた。

既にあらゆるものが消えようとしていた。4月1日午後、母が面会にきていた。附添看護婦をつける話を廊下で聞いたあと、病室で待つていた母の前で何もいわずは

らはらと涙をこぼしたがすぐに泣きやみ「今日だけはかえつて頂戴」と母をかえした。母はいつものように別れの握手を求めた。おそらくは10数分後、彼女は母のあとを追うようにあわたゞしい夕暮の病院をあとにした。桜のもつとも美しい頃であつた。発見されたのは3日後郊外の花の名所、大きな桜の木の下によこたわつていた。

彼女は死んだ。彼女の光は消えた。しゃべることも、うごくことも、考えることもなくなつてしまつた。もはや偶像でもなければ、木の切れはしでもない。彼女はたつたひとりで死んでいつた。それはもう、いかなるにおいもないことである。

これは決して彼女の死を深刻化しようとして強調されたものではない。この死の姿、死の事実がもつともよく彼女の歴史をあらわしており、更に、においの意味を示していると思われるからである。彼女の歴史は偶像崩壊の歴史であり、死における超越の歴史であり、これが同時に彼女のにおいの消褪の歴史である。これらは切り離して考えることの出来ないものである。いわば偶像の崩壊は超越であり、偶像の崩壊によつてにおいは消え、超越においてにおいが消えたのである。

彼女は死んだ。しかし4月1日突然に死んだのではない。既にその前の年の9月頃から、即ちにおいが消えはじめた頃から、死は彼女にあらわれて、日ごとに膨大していつたのである。この病歴はいわばその死の歴史といえよう。9月頃から彼女はひたすら孤立への道をたどつていた。身近かに親しみなれてたものすべてが無に帰し、家族とのきづなもたちぎれていつた。かつての偶像としての輝かしい希望も消えた。かたく自分を閉ざし、動くことも、しゃべることも次第に出来なくなつた。自分をいゝあらわさなくなつた。いゝあらわすべき自分すらわからなくなつたのである。そして死の間際にはなにひとつ考えることもなく、ぼんやりして、言葉は失われた。彼女は「空っぽのまま、自分ひとりいるような」状態になつていた。過去もなく、未来もなく、たゞ時間が過ぎてゆく。彼女は茫然として、恍惚とさえていた。彼女は死にかけている。だがこの恍惚は何を意味するであろうか。死を超えることによつて、本来の実存に到達した彼女の脱自的時間性を意味していると思う。なるほど彼女は言葉を失つた。そして現世の光は消えた。だがこの無の深淵の中に、この暗闇の中に、存在が明るくてらしだされたのではなかろうか。「なんかしゃべらなくても安心しておれる」という彼女の言葉が私には存在の明るみの中にうかびあがつた存在の言葉に思えてならな

いのである。もつとも美しい存在の光が《現》をてらしかけていたのではなからうか。その時こそ彼女はあらたに生きるべきであつた。だが、彼女においてこの実存にいたることが、生命を犠牲にすることであつたとは Binswanger もいうようにあまりにも悲劇的であつた。

このように苦しんだ彼女の生涯は、又においの歴史でもあつた。父の死、初潮にひきついておこり5年間、においつぶけたにおいが自殺への道をたどることにおいて消えていつたのである。父の死後、にわかには生は困難なものとなつた。最も父を愛していたという彼女は世界の異邦人となつた。母とも相談しなくなり、人との交わりもなく、しかも逃れるすべもなくへばりついた世界の中に、彼女は偶像の如く、におわざるを得なかつたのであろう。だが偶像はくづれおちる。大学入試という困難が彼女の偶像崩壊に拍車をかけたかもしれない。彼女は偶像を破壊した。自分自身を殺した。彼女は自分の生命を犠牲にすることによつて本来の自己性を獲得しようとした。それはこのへばりつく世界を無化し、超越することである。彼女が「私がひとりいるみたい、完全に空っぽになつちやつたら気持ちいゝかもしれない」という時、彼女は言葉もなく、「自意識」もなく、そして未来も過去もなく、彼女はまさにいかなるにおいもしないような無臭の存在である。すべては消えた。そして彼女はこの無の中にはじめて新たな自己性として存在へと飛翔したのである。「においがする」そして「においがしなくなつた」という彼女の言葉は——この言葉が彼女の主症状であつたが——かゝる現存在の存在をいゝあらわしていたのだと思う。

彼女は超越へと飛翔しつゝ死んでいた。彼女は黙して語らなかつたのであるが、死は彼女にとつて父との合一を意味していたのではなかつたらうか。それは超越的愛であり、父なるものへの接近である。父と離れてはじまつたにおいが、再び父に近づくことにおいて消えたのだといゝ得るかもしれない。だが彼女の死んでしまつた今、きゝたゝすすべもない。

第 3 例

Y.A. 17 才 男 学生

〔遺伝歴〕父系に精神分裂病、自殺が多い。祖父は検事で裁判署長であつたが、その祖父の兄の子5人のうち2人が自殺した。ひとりとは明るい性格の小学教員だつたが、佐渡に行く途中、海にとび込み死体が発見されなかつた。その弟も明るい人だつたが、受験に失敗して鉄道自殺を遂げた。又この祖父の弟の子は4人のうち2人が

典型的な精神分裂病となり、いずれも荒廢状態で死亡した。

父は物静かで見ると暗い陰気な人である。人あたりは柔かである。家では全く無口で、過敏、気むづかしく、ひがみ屋、人間嫌いで親類づき合いを全くしない。中学時代、道のあるいている人が皆自分を見ているようでこわく、外にでれないで家にひきこもつて、医者にみてもらつていた時期がある。その頃から不眠症がつよく、現在も尚、眠剤、鎮静剤を常用している。大酒家でのむと人間がかわつたように愚痴つぽく、怒りつぽくなる。父の兄は左翼系詩人、思想犯として投獄されたことがある。父の姉はピアニストであるが失恋して自殺しそこねた。

母はもとバスの車掌、てんかん性大発作があり、出産時障害によるものといわれていた。階段からおちて怪我をしたことがあり発作を苦にしてアレピアチン自殺をとげた。やさしい性格であつたという。母系にはそれ以外に精神疾患はないらしい。

たゞひとりの同胞である兄も過敏、内向的で暗い。カトリックに熱中し、烈しい政治運動に参加する。最近、心氣的傾向がつよく、休学を希望し、自分で食餌療法をやつている。

〔生活歴〕昭和18年8月、中野に生れた。母は衰弱しており母乳もあまりでなかつた。生後10カ月上記の如く母は自殺を遂げた。生後1年4カ月、父は出征した。召集令状をうけとつた父は、兄をその祖父母のもとに、患者を自分の兄嫁の所にあづけて出発した。産まず女であるこの義理の伯母は冷淡で疳がつよく、幼い患者を厄介者あつかいにし、躰けが大事だと手にお灸をすえた。当時は食料難である。ひもじさのあまりお膳に手をだすと帰省した父の前でも、その手をびしつとたゝいた。見かねた父は患者を地方の友人宅にあづけた。やせて栄養失調のようであつた幼な子は、そこの事務所働いていたひとりの女性に可愛いがられるようになった。疳はつよいが行儀よく、はしやがない子供だつた。数カ月後、復員した父はこの女性と正式に再婚した。現在の母である。兄もかえつて昭和22年から一家4人東京でくらすようになった。父は公務員で安定した要職についている。入院直後まで患者だけは母が継母であることを知らされなかつた。継母は優しく明るくしつかりした性格で、熱心に子供たちを育てた。上記の如く、父や兄が無口で暗い変人だつたので、継母はこの家庭での唯一の明るい光であつた。父は酒をのむといつまでものみつゝけ、僅かなことで衝動的にコップをぶついたり、子供たちを

つかまえてはくどくどと「僕は死にたい。しかしお前たちがいるから生きているんだ」と厭世的な愚痴をくりかえすことが多かつた。患者は父をけむたがり、酔う父を特に嫌って聞えよがしに不平をもらし「あんな酔っぱらいはつておいて寝ちやえ」と母を2階にひっぱつていつた。母が留守だと台所を綺麗に片付けたり、母の肩をもんだり、母にはやさしかつた。性質は彼自身も神経質で引込思案、非社交的、消極的であり、家の中では気むづかし、不機嫌になることが多かつた。たゞ来客があるとがらりと態度が変わり、如才なく、明るい笑顔を示し、明るいよい子だと評判はよかつた。やせ型で容貌も女性的だが、性格も弱々しく、女性的な所が目立ち「ミスお嬢さん」といわれていた。友だちもすくなく、女の子や年下の子とあそんでいた。

〔身体歴〕既往に特記すべき疾患はない。乗物酔がうまく、まづ蒼になりよく吐いたことがある。尚、発病後昭和34年、星をみていて物干台から落ちて頭部を強打したが入院してからの身体的諸検査では異常はみとめられていない。

〔現病歴〕昭和32年、中学2年の秋、風呂で体を洗っているうちに自然に気持ちよくなり自慰をおぼえた。あとは体がふにやふにやになるような感じとやらなければよかつたという気持ちにおそわれたが、その後もやめられなかつた。それを一番苦しむようになったのはにおうことがわかつてからである。

昭和34年、中学3年3学期、席が前の方に変つたが、その時からうしろの生徒にじろじろみられているような恐怖感にさらされていた。4つの高校を受験し、次々と3つが不合格となり、4番目にやつと合格がきまつた頃だつた。卒業式の予行の日である。その数日前から自分自身にはにおつていたと記憶するが、その集りの時はじめてまわりの人が鼻をふんふん鳴らしはじめた。それが自分のまわりの人だけなので自分がにおっているせいだと思つた。間もなくそれが性器からのにおいで自慰行為のせいであり、精液のにおいではないかと思うようになった。その時から自慰をやめた。だが夢精はとまらず、そのために、においは消えなかつた。

2月頃から頭痛を訴えるようになった。始終焦々して、部屋が整頓していないといつて気をくさらせて怒つたりした。猫にあたつてなぐつたり、放り投げたりした。人に会うのを特にいやがり、「僕みたいな人間死んだ方がいゝ」としきりにいつていた。

高校に入つてからは、学校で友だちが鼻をくんくんさせるだけでなく、電車でも道でも人が鼻をこするように

なつた。そのため人から離れているようにした。ナフタリンをポケットに入れたり、クリームをおなかにぬつたりしたが駄目だつた。「パンツをはきかえてもにおう。精液がついていない筈なのにゝおう。おかしいとは思うが、確かににおつているということは相手の態度でわかる。1学期の3分の2は学校をやすんでしまった。「家ではそんなににおわない。におつても家の人は気がつかない」

昭和34年7月、泌尿科に受診、異常ないといわれ、みかたが不親切だとおこつていたがその翌日、順天堂神経科を訪れた。

1. 生きているにおい

見るからにひ弱い、華奢で、女性的な、繊細な感じのする少年で、のちになつて明らかになつてきた野心的傾向やひねくれた厭世感などは内にひめられて初診当初は気づかれなかつた。彼の悩んでいるにおいが如何に状況によつて変化するか、まづそれを彼の言葉によつて示そうと思う。

「隣の席の生徒が³ふんふんやつている。身をよせるようにしてこちらにかいどくる。やはり自分のにおいのせいだ。」「電車の中で、立つていても自分で感ずるほどひどい性器のにおいがした。幸い、傍らにいた人にはわからなかつたらしい。」「2カ月間の外来通院時はこのようなことを訴えつづけていたのだが、においは決して一定した強さでにおっているのではなかつた。においは彼のおかれた状況によつて変化した。」「においは気持ちの持ち方によるもので、教室や人ごみであせつたり緊張したりするとにおう。あまり気にしすぎると余計にくさくなる。考えるのをよそうと思つても隣の人がふんふんやつており、つらい立場においやられ、かつとなり、におうようになる。」「このように対人的な場面に応じてにおいの出かたは変化した。通院中、母と2人で郷里にいつたことがあるがその間、ずつとにおいは全く消えていた。しかし、帰りの電車の中では「東京に近づくにつれてなんだかせわしく、色々なことを考えて頭が痛くなり、再びもとのようににおいが気になるようになってきた」という。昭和34年9月5日、2カ月の外来通院でさつぱりよくなりそうにないので入院した。この時も入院という環境の変化が患者を非常に楽にしたようである。入院直後既に「入院してから他人の動作はあまり気にならない。僕のおいには人にはわかつていないようだ。におうような気持ちがしたことはちよつとあるがはつきりしない」といゝ、更に9月末には「この所調子はいゝ。においもしなくなつた。気にならなくなつた。それは病院

にいと気が楽なせいだろう。今なら近くでふんふんやられても平気だ」というような日もあるまでになった。

だが殆どにおいも消えかけていた9月末、夢精が2回ほどあつた。眠つていて自然に手がいき、こすつてしまうのだという。自責の念は痛ましい程であつた。「しなければよかったと思う。又くさいのが出るんじゃないか。それをやつたことによつて、もうなおらないんじゃないか?」と打ちしおれた。果して、その次の日から再び生々しいにおいが発散するのである。

「人がくるとにおいが出てくる。人はふんふんやつている。においを人は感づいていると思う。人のいる所で椅子にすわつていると、じつとしていしあせりがちで緊張するから、特に悪く、遠くの人にもおうんじやないか。」

このように彼のにおいは乞食のまとうぼろぎれのように常に同じ強さでおつているのではない。彼のにおいは時間と空間の中で生きているといえる。その時々状況にびつたりと一致して刻々に変化している。帰りの電車の中の例をみても、においはあたかも状況の変化そのものをいゝあらわしているかの如くである。そして「人がくるとにおいが出てくる」という夢精後の生き生きとしたにおいについての一節は彼のにおう有様をもつとも適確に表現していると思う。それは丁度、戯れる動物たちの互にかわすにおいの如く、いのちをもつたにおいである。即ち、においは死せるものゝにおいではなく、状況の中に生きているものゝ、生きているが故のにおいである。

2. 人間としての悩み

Insulin 衝撃療法を10月下旬からはじめたが、その前後からにおいに批判的になると共に、しきりに人間としての悩みを口にするようになった。殆どが自分の将来についての悩みであつたが、彼はそれがにおいの悩みと同じ位、いやそれよりも重大なものであるといつて雄辯に語つた。

「今はほかの悩みが出てきた。昔のこと、将来のこと、現実のこと、色々のことが泉の如く湧きでている。入院した頃はにおいのことばかり思いつめていた。しかしこの頃はにおいのことをあまり気にしなくなつた。だがどちらの悩みも同じであることがいけない。即ち、いづれも人生に対して希望がない。絶望であるということである。

「自分には自分の将来が見えているような気がしてならない。僕の将来は味けなく、人間として墮落している

ように思う。もつと真剣にやるべきとは思ふが口先だけ、本当は腐つちやつている。そもそも、世の中がいやになつたとか、自分の将来が見えるとか、世の中は味けないとか、人間は下らないなんて考えること自体、墮落していると思う」

「なんとか強くなりたいと思うが自分自身に障害が多すぎる。私には努力する力がない。途中で挫折してしまう。忍耐力がない。なんか大きなことにぶつかると乗り越えてゆけない。消極的で女みたいに弱い。人間を疑い、よごれていると思う。私は冷く、陰気で、人間嫌いで、独りでいた方がいゝと思う。しかし、これは我儘であり、ひとりで社会に生きてゆくことは出来ない。」

「将来のことが不定でならない。結婚して、どうやつたら一家を支えて行けるだろうか。子供ができれば子供たちにはじきとばされるんじゃないだろうか。けむたがられるんじゃないだろうか」

「なんとかして強い人間になりたい。僕なんか生きていてもしょうがないから、死ぬのならかわつてやりたいが、しかし、絶対に生きてゆこうという気持はもつている。一方ではどんなことがあつても生きなければという気持があると共に、生きる希望がなく、いやになつてしまう。人生は人間を修練する場所だ。毎日がのんびんだらりとして、自由がありすぎるんだと思う。だらけちやつて、自由がこわい。自分という存在が消えてしまうのではないかと思う。なんだか世の中というものに疲れたような気がして本当に癡人に、下らない人間になつたように思える」

以上が彼の口にした内的な悩みのおゝもそであり、その分析は後にするが、目立つことは、彼が自分の弱さを苦にして、ひたすら力を求め、強い人間になろうと決意していたことである。昭和34年12月、においは消えないまゝに退院したが、果せるかな彼は異常なまでにあらゆる方面に手をだした。中学時代にひそかにあこがれていた女生徒との文通をはじめ、又、病院で世話になつた看護婦とも友達になろうと苦心した。毎日のようにひとりで近所の卓球場にかよい、囲碁をおぼえたからと病院にきて医師に対局を求めた。そのほかにも、ピアノを習いたい、珠算塾にかよいたいといゝ、親類の店の配達も手伝おうとした。四方八方に手をひろげ発展しようという動きに無理のある不自然な強がりが感じられた。「絶望だ。駄目な人間だ」といゝながら学年末試験には夜もねないで猛勉強して「皆をあつといわせたんだ」というようなことをいつた。「この病気の原因は性格の弱さからきている。夢精は原因のひとつかもしれないが、大部

分は性格からきている。夢精がなかつたとしても僕はにおつていたかも知れない」と述べたのは当時、退院直後である。その頃、においの悩みはやゝすくなかつた。だがそんな時はかえつて、すこしでも自分が思うようにならぬと不機嫌になり、鉛筆で障子一杯に穴をあけたり、ノートを減茶減茶にしたり、物を投げつけたりした。自分の不甲斐なさをひどくやしがり、物にあたつた。

退院後1年以上になるがずっと学校にかよつており、成績もいゝ。時々ひよつこ病院を訪れるが、においは消えず、かなり深刻に悩んでいる。

3. 死ぬことのない未来

彼は人間としての悩みとにおいの悩みは同じであり、どちらも自分の弱さからきていると考えている。こゝで私は人間的により深く彼に近づくことによつて、彼のにおいのより根源的意味を問おうと思う。

彼の悩みはこれから生きてゆくことである。味けなく、下らない、墮落した、腐つた人生を癡人として生きてゆくことに対する絶望である。こゝで彼は人生を既にこのようなものとして見通していること自体が墮落であるといつている。確かにこのことは人間をしてもつとも人間たらしめる創造的使命を放棄することであり、人間から墮ちるという意味において墮落である。墮ちて彼は腐つた人間となる。彼は自分の生涯を腐つた人間として決定づけている。だがこのことは彼の未来がいかなる可能性もなく閉ざされており、もう生きる術がないということではない。むしろ彼は「自由がありすぎる」という。彼の未来は半透明ではあるが無限にひろがっている時間の広場である。彼はあたかも広場恐怖をもつ人のように「自由がこわい」という。彼は現存在の有限なる時間性を喪失しているのである。「私の死」に対峙することなく、あらゆることが無限に可能であるかの如く考えて、自由をおそれるのである。彼には切迫する死の不安はない。だが死ぬことがないという永却の枷の中に苦しむのである。それは終りのない、死によつて救われることのない苦悩である。彼はあらゆる意味で死ぬことが出来ない。自分を殺し、自分を無化することが出来ない。「死にかゝわる存在」をひきうけることが出来ず、どこからどこへという窮極目的がない故に、未来はいたづらに拡散して、いかなる方向も、いかなるあゆみもない。私の死をひきうけ、超越へと飛翔して距離的な存在として孤立する強さをもてない故に、いかなるものにも真実に接近することが出来ない。世界を超え、自分を超えて、あらたに世界にむかうことは出来ない。

彼は自分の弱さを克服しようと、退院後みられたよう

に、力の獲得へと痛々しいまでの努力をつづけた。だが如何に努力しても、怪物のような自己の壁にぶつかるだけであつた。自己をつきやぶり、自己を超越して、世界にむかい、あらたなる存在の光にてらしたされることはなかつた。

実存としての死がない故に、彼はいかなる方向もなく、たゞうごめき、既に腐つた人間として、生きながらえるのである。いわば、死ぬことができないという枷につながれた生ける屍の如くである。「私はいやなにおいを発散させている」という言葉が既に人間のこのような絶望をいゝあらわしていると思う。

考 察

私はあまりしられていないこの種の患者の人間的な悩みをよりよく理解するために、この人間をひとりの歴史的存在として、素材にあるがまゝに記載し、その人間を全体として根底からえがきだそうとした。だが可能性としての人間は無限であり、宇宙の如くぼう大である。有限なる記載はつねに何等かの立場に立たねばならぬ。その時、ある立脚点に立つて鳥瞰図的に描かれた人間は影絵の如きものにすぎず、人間そのものはつねに逃れて地平のかたにある。いかに人間を把握しようとしても、人間はその手からこぼれて、手の中には人間の殻が残るだけであろう。えがかれたものゝ中でその人間の本質的なものを問おうとしても、存在論的なものはつねに彼方にあり、我々にあらわれるものは存在的なものだけである。このような人間を私はいかに書きあらわして、その存在を問おうとしたであらうか。

存在の領域は限りなく言葉を愛し、尊重することなしには語ることでない領域である。Heideggerが言葉についてのべているように、言葉は無の中に明るみとしてうかびあがつてくるものであり、言葉は存在を建設しつゝ、存在によつて建設されるものである。このような意味で言葉は窮極的に現存在の深淵にかゝわつている。果して到達しうるか否かは別として、私が第一に意図した所は Hölderlin が言葉によつて存在を建設したように、「におっている」と訴える患者の現存在の存在を言葉によつて建設することであつた。だが存在を言葉によつて建設するということは「引裂く時のなかで止まるものを把握する」という難解な言葉が示すように、みづから引裂きつゝ脱自的時間性へと超越することにおいてのみ可能である。過去、現在、未来を超越した脱自的時間性においてはじめて、私は患者の存在の声に耳をかたむけ、存在の言葉を聞くことが出来るのである。これは超越的

な交わりである。その時、言葉は単なる符合ではなく、意味をもち、本来の世界を開示するのであろう。以上が私の症例記述の根本的態度であり、このようにして「私はにおう」という言葉の意味を問おうとしたのである。

このようにしてえがきだされた人間像は歴史的存在として、明るみである。この明るみの中に「私は嫌なにおいを発散させている」と訴える人間が、根源的に実存の深淵において、におうが如き存在であるのを見るのである。この事実はえがきだされた人間を次のようにいうことによつてよりあきらかにされるであろう。

「私はにおう」という人間は現存在というにふさわしくない存在である。超越として距離的存在であるのではない。なんのへだたりもなく、あらゆる存在者になれ親しんで世界にへばりついている。死にかゝわる存在として超越することがない。世界をこえることがない。世界をこえることが出来ない故に、いかなるあゆみもなく、生成発展もない。いたづらに世界の内部でうごめき、ぶつかりあい、世界内部的存在者として、墮落し、腐敗し、死ぬことも出来ず生きながらえている。死という窮極目的がない故に、方向もなく、もがけばもがくほど自己は拡散する未来となる。死という最後の救いがないために世界という永劫の枷の中でのがれるすべもなく「生ける屍の如く」である。私は実存の地平において、このような存在に出会った。これはまさに「におうが如き存在」である。「私はにおう」という患者の言葉はこの根源的な「におうが如き存在」をさしめしていると思う。しかもこのにおうが如き存在すべてを規定しているものが「私の死」の忘却であり、死ぬことが出来ず、生きながらえていることである。「私はにおう」という言葉はこのような死のない世界を開示しているのである。

だが最後にもつとも大切なことは、においがいかに消えていつたかということである。においは先にのべた死のない世界に死があらわれることにおいて消えたのである。勿論、それは必しも肉体の死を意味しない。逃れるすべのない死、自分をいつとらえるかもしれない死、この死をつねに自分の死としてひきうけていなければならない死、そして自らも撰ぶことが出来る死、それがあらわれることにおいてにおいは消えるのである。その時、自分のまわりにはなにもない。自分自身すらなにもない。第2例に記載された死にいたる超越のありさまがもつとも具体的な言葉としてそれを示したであろう。無なる存在として、真に距離的な存在として、脱我的超越として孤立する時、においは消えるのである。「もうにおいは

しない」という時、べとつた世界は全く消えさつているのである。「もうにおいはしない」。この言葉はこの無の中に存在としてうかびあがつてきた言葉であるといえよう。

結 語

私はこのようににおいはあたかも生ける屍の如くにおつているのだといふ、唯一の救いは死ぬことであるといつた。だが、私は道に迷っているのかもしれない。なぜなら、超越にことかく私自身もにおう筈となるからである。私は今この迷路からぬけだす道をしらない。人間の限界なのであろうか。歴史がつねに書きかえられねばならぬとはこのことなのであろうか。失われた存在をとりもどすために、私自身あらためて無の中に消えてゆかねばならない。

Point de cantique: tenir le pas gagné. Dure nuit! le sang séché fume sur ma face, et je n'ai rien derrière moi, que cet horrible arbrisseau!

Arthur Rimbaud

稿を終るに臨み、終始御懇篤なる御指導と御校閲を賜つた懸田克躬教授並びに種々御援助いたゞいた教室員各位に心から感謝致します。

参 考 文 献

- 1) Binswanger, L.: Schizophrenie, Pfullingen (1957).
- 2) Boss, M.: Psychoanalyse und Daseinsanalytik, Stuttgart (1957).
- 3) Heidegger, M.: Sein und Zeit, 8 Aufl., Tübingen: Max Niemeyer (1957).
- 4) Kahn, E.: Psychiat. Neurol., Basel: 137: 145-162, (1959).
- 5) 鹿野達男・他: 精神医学, 2-1, (1960).
- 6) Kierkegaard, S.: 「死に至る病」, 斎藤信治訳, 東京, 岩波書店, (昭28).
- 7) Kulenkampff, C.: Nervenarzt, 27, 2 (1956).
- 8) May, R.: Existence, New York (1958).
- 9) Minkowski, E.: L'évolution psychiatrique. 59-99, (1950).
- 10) 斎藤信治: 実存の形而上学, 東京, 桜井書店, (昭和22).
- 11) Sartre, J.P.: L'être et le néant, Paris: Librairie Gallimard (1943).
- 12) Wulff, E.: Nervenarzt, 29, 60 (1958).

Résumé

Le sujet principal de cette étude est l'odeur imaginaire du corps propre. Notre malade croit affirmativement qu'il sent mauvais et que toutes les personnes de son entourage font la grimace et s'éloignent de lui. Je m'approchais d'une trentaine de cette sorte de malades. Mais ici il ne s'agit pas de l'étude catégorisée en général. Trois cas de ces malades ont été décrits en détail et ils ont été analysés existentiellement.

A proprement parler, être puant, c'est vivre dans le monde visqueux. Il ne peut sortir de ce monde ni de la vie.

Eternellement, il demeure puant comme un cadavre vivant. Pour faire disparaître cette odeur dégoûtant, il faut mourir transcendantale. Alors, tout le monde et l'odeur s'éteint et déjà! il ne reste qu'un néant absolu.

Résumé Par l'auteur

Département Neuro-psychiatrique, Juntendo Université, Ecole de Médecine